

[普及の現場から]

乳量・乳質の高位安定は基本技術の徹底から (亀山昭博牧場の事例)

倉敷農業普及指導センター

1. はじめに

岡山市北区横尾で30頭規模の酪農を営む亀山昭博さんは、平成16年にお父さんの後を継ぎ就農されました。その後経験が浅いにも関わらず、乳量並びに乳質もトップクラスの成績を維持しており、平成18・19年には良質乳表彰を、また平成21・22年には乳用牛群検定優秀農家として乳量表彰を受けています。そこで、高乳量・乳質安定技術の秘訣を伺いました。

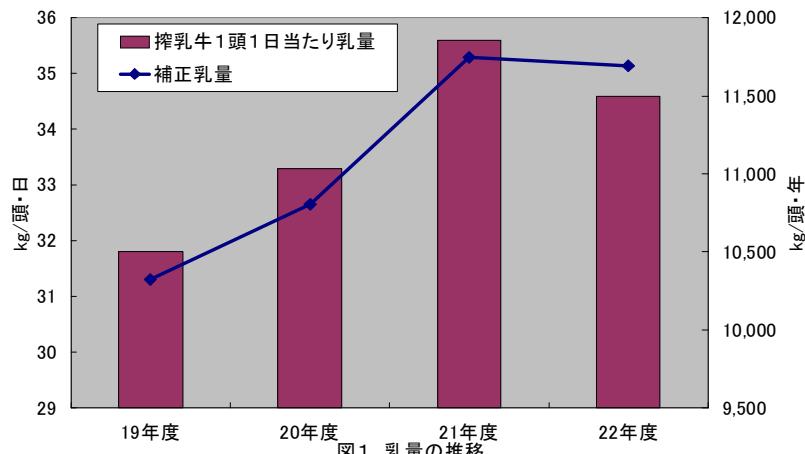


2. 高乳量を確保するために

図1に示すとおり搾乳牛1頭1日当たりの乳量は35kg前後、年間補正乳量も11,500kg程度と高位を維持しています。

就農と同時に、おからく指導のもと乳量と乳房付着に主眼をおいて優良牛を多数導入しました。この導入牛が現在の礎を築いたことは間違ひありません。また、以前の繋ぎ飼い牛舎をフリーバーン牛舎に改造し、乗駕行動による発情発見が容易となることやストレスの解消等が乳量の増加に役立っています。

搾乳牛への飼料は系統の発酵TMR飼料(TDN37%、CP8%)をベースとしてバルク乳量に100kg(冬季は150kg)をプラスして給与し、スーダンあるいはオーツヘイを2kg、ルーサンを



1kg弱給与しています。餌をケチらず、良質なものを十分に食い込ませることが大切と考え、飼槽の掃き寄せも1日10回以上行います。

また、乳量の高い牛や初産牛を早めに搾乳することによって、搾乳後の採食時間が多くとれるように工夫しています。

乾乳牛には1日5回に分けて乾草と乾乳期用配合飼料を給与し、特に分娩前3週間は配合飼料を6kgまで増給して分娩後の採食量の確保を狙っています。さらに、分娩後の母牛には、カルシウム1kg、ビタミン剤250ml、味噌150gを40Lのぬるま湯に溶いた“スペシャルドリンク”を飲ませ、体力の早期回復に努めています。

これらにより、乳量ピークは50kg／日以下ではあるものの下降速度が緩やかで結果として総乳量の確保に結びついています。

3. 乳質の安定のために

図2に体細胞数の推移を示しました。食品を生産しているとの自負から衛生管理には特に気を付けています。

牛床は朝夕2回十分な時間を割いて、スコップでふんを除去し、均平にならすなどベッドメーキングは入念に行います。よく乾燥した戻し堆肥（副資材はカンナ屑）を毎日1.5立米ベッドに投入するとともに生菌剤を撒き、飼槽側は2日に1回除ふんします。そうすることにより牛床は常にふかふかの状態をキープでき、牛体の汚れも少ないとため乳房炎の罹患率が下がり、細菌数や体細胞数が低減する要因となっています。

搾乳手順は次のとおりで、手作りパラレル型パーラー（4頭）で“基本に忠実”な搾乳を心掛けています。

- ①搾乳に当たっては必ず搾乳手袋を装着。
- ②ストリップカップを用いて各乳頭10回以上の前搾りを行う。
- ③乳頭清拭タオルは汚れ落としに1枚、仕上げに1枚の計2枚以上を使用。
- ④ミルカー装着後5分以内に搾り切り。

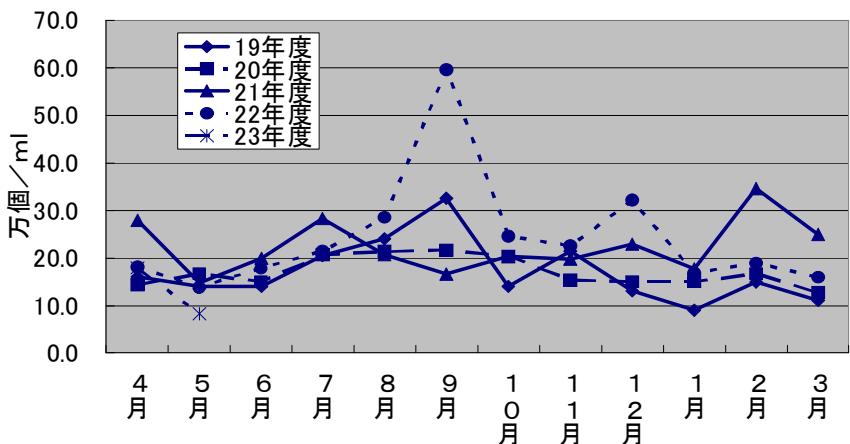


図2 体細胞数



⑤ポストディッピング（ノンリターン泡タイプ）で搾乳終了。

毎月の牛群検定成績をフル活用して異常があればすぐに手を打つ姿勢を持ち続けています。また、乾乳期が近づくと乳を家畜保健衛生所に持ち込み、細菌検査をしてもらいます。そうすることで、乾乳期治療が徹底でき、次回の乳房炎の発症を抑制することができます。さらに、年1回全頭の血液検査を実施し、牛の健康状態のチェックも行っています。



4. 育成牛の外部預託

亀山牧場では生まれた雌牛はほとんどをヌレ子から矢掛の育成牧場へ預託しています。育成中期からは北海道に場所を移し、優良後継牛として育てられたものが、初産2~3ヶ月前に帰ってきます。育成牛を手元に置かないことで経産牛に集中でき、管理の集約化に役立っています。

5. おわりに

経験が浅いために外部からのアドバイスに素直に耳を傾け、忠実に実行してきたことが今の成績につながっています。

何事も基本が大事！！